

1. 縫製業の最賃額決定が新たな段階へ

9/16、社会問題省の職員で構成された委員会のメンバー4人が、縫製業労働者の最低賃金引き上げに関して、これからの方針に関し話し合いを行なった。この話し合いに引き続いて、社会問題相の Ith Sam Heng 氏は、記者会見し、「話し合いでは、工場の生産性や縫製業労働者の収入、生活費などといった項目を、賃上げ額決定に反映させるようにしている。委員会は1ヶ月程度でリサーチを終え、提案を提出することになっている。11月までには何らかの進展を得られるであろう。委員会のメンバーにはカンボジア縫製業協会の組合メンバーも所属している」などと話した。

社会問題省と労務省が、40万人を超えるカンボジア国内の縫製業労働者の給料を決定することとなり、また話し合いは、縫製業だけでなく産業や観光、輸送といった分野に携わる労働者達の賃金も含んで行われる予定である。

2. 複数の失神事件の原因は栄養失調か

9/23、NGO 団体のコミュニティ法教育センター(CLEC)は、「カンボジアの縫製業でこれまで見られてきた、一度に大量の労働者が失神するといった現象は、栄養失調や低賃金といった要素が大きく関わって引き起こされたものである」というレポートを発表した。

それによると、被験者となった95人の労働者のうち33%に栄養失調の症状が見られ、25%は危機的なほどに衰弱していたと言うのだ。「痩せている人が多すぎ、とても危惧しています」と、被験者へのBMIテストを実地したCLECのコンサルタントは話した。

縫製業で働く労働者達が1日に消費するのは平均1,598カロリーだが、工業環境で中程度から重度の肉体労働を行うためには少なくとも3000カロリーを摂取する必要がある、と報告されている。また、レポートによると、適切な栄養価のある食事をきちんととろうと思えば、月に75ドルはかかる。しかしカンボジアの最低賃金である月額80ドルのみを収入としている人々にとっては、これは高すぎる値段であり不可能である。また、低賃金、栄養失調以外の、失神を引き起こす原因としては、過労や不十分な換気、水へのアクセスの悪さなどがあるようだ。

カンボジアアパレル労働者民主組合連盟の副代表 Kong Athit 氏は、「一度に何百人もの労働者が失神するといった現象は、長い間カンボジアの縫製業のみに見られる特有の風土病のようなものでありました。この病がメディアに露出し始めたのはここ数年のことですが、実際には1990年代から時折起こっていました。97年と98年にあったのは覚えています。それが今日までも続いているのです」と話す。かつて工場の労働者であったAthit氏は、実際に失神していく労働者の姿を目の当たりにしたことがあると話す。そして、「労働者達をいまだ失神に至らしめる最大の原因は、カンボジア政府が工場オーナーや製品のバイヤー達に対して労働者の労働環境を考慮するよう、圧力を十分にかけていることができていないこと、またそれを行おうとする政治的意思も低いことにある。バイヤーのブランド企業や工場オーナー達にはもっとすべきことがあると、私は思っています」と話す。

賃金の引き上げに加えて、工場が労働者達へ間食などを提供するよう、レポートは呼びかけている。また、海外ブランド企業に対しては、労働者達の栄養失調に関するコメントを発表すること、そしてカンボジア政府に対しては労働者への食料提供をサポートすることを、それぞれ呼びかけている。しかし、レポートの中で訴えられている栄養不良と低賃金との相互関係は、カンボジア縫製業協会(GMAC)の代表 Ken Loo 氏にとっては些か懐疑的なものであったようだ。Ken Loo氏は、「十分にものを食べる経済力が彼らにないなんて、馬鹿げた話ではないでしょうか。携帯電話は買うのに食事はできないなんて、私にはおかしい話に思えますが。80ドルの最低賃金とは別に、大半の労働者達は残業代やボーナスをゲットし、だいたい月に150ドルは稼いでいます。この金額は1人で暮らすのに必要な額を十分に満たしています」と話している。

3. SL Garment 社 で、スト中にけが人発生

数週間に渡って行われたストライキは、9/21の夜について一部暴動へと発展し、工場を守るために雇われた警備隊員が1人の男性を強く殴打したようだ。SL Garment Processing に努めているおよそ2000人の労働者は、9/21にも引き続きストライキを行っていた。このうち外の道路を閉鎖している労働者もいたし、工場内でストを行っていた労働者もいた。そのような中で、Sun Sengさん50歳は、ストライキに参加する労働者と、仕事に戻ろうとする労働者との間を取り持とうと奮闘していた。しかし彼はウェブサイト動画にアップし、自分が警備員達達により人ごみの外に連れ出され、



数人がかりで殴打されたことを発表。Sengさんは病院に運ばれ、9/22の夜まで治療を受けていたようだ。SLの職員であるSao Chhin氏は、今回の暴動を引き起こしたのは全て労働者の方であると話し、また、Sengさん以外にも10人が負傷したことを明らかにした。

4. Chhin Chin garment 社のスト、労働者と和解

9/24、Chhin Chin 縫製工場の経営側は、およそ150人の労働者がストを行い要求していた、カンボジアのお盆にあたるプチュンバンに備えての給料の前借りを承認した。スト活動は、工場がある国道4号線を一時的に封鎖していた。プノンペンのPor Sen Chey 地区にあるこの工場では、労働者達が以前から給料の前借りを要求していた。会社側は給料の半分までは前借りを認めたが、全額を求める労働者の要求とは食い違い、結局ストライキが発生することとなった。「給料日は、実際プチュンバン後になってしまうので、労働者達はそれより先に必要だと訴えていました」と、Por Sen Chey 地区にあるChoam Chao において今回の交渉を監視したVa Saromg氏は話す。「4時間に渡る交渉の末、経営側は全額の前借りに応じる姿勢を見せた」とSaromg氏は付け加えた。

5. プノンペンのスラムの実情

9/19の会議においてユニセフは、「プノンペンからスラムを無くすための計画をきちんと練るように」とプノンペン市議会に圧力をかけた。しかし彼らの答えは、「スラムはそんなに早くなくせるものではない」、といったものだった。市議会によると、首都プノンペンには281ものスラムとみなされるコミュニティがあり、そこを家とする家族が2,033世帯あるとの統計が出ている。今年早く、それらの世帯の中から42世帯を調査し、インタビューを行なった。そして判明したことは、世帯のうち86%は土地所有の権利を持っておらず、いつ追い出されるかわからない状態にあるということだ。さらに88%は廃棄物回収を職業としており、また飲料水へのアクセスを持っておらず、55%は自分たち家族の健康状態が悪いと話しており、子供のうち76%はお金がなく学校に通うことが出来ていない。また、それに加えて、住人の69%は家庭内暴力を経験しており、14%は何らかのドラッグを使用し、4%は性的虐待を受けているようだ。

ユニセフ代表のRana Flower氏は、「私達は、現在彼らが抱えている様々な問題を解決し、移住環境が少しでもよくなって欲しいと考えています。彼らの大半は、建設業や工場、モトドップやトゥクトゥクのドライバー、そしてゴミ収集といった業種の人たちです。生活を改善するための経済的余裕が彼らにはありません」と、話している。

プノンペン議員のPa Socheatvong氏によると、政府はスラム住人の生活状態に関して調査を行う予定であるものの、正確なスケジュールなどを出すことは拒んでいるようだ。「環境を整えるために、もっと時間が必要です。水や下水道といったインフラも整備していかなくてはなりません。あまりに多くのスラムが存在しているので、一気に彼らを助けることなどは出来ません。プノンペンのスラムをなくすことは、スラムに暮らす住人達を助けるということだけではなく、市の観光をより活性化させるといった意味もあるはずだ」と彼は話す。

一方、45歳のChun Srey Neangさんは、Prey Veng 州から仕事を求めてプノンペンにやってきたものの、Stung Meanchey のスラムで家族と生活し始めもう20年以上がたつという。「家を借りるお金がないのです。たしかに私のすみかはゴミだらけですが、しかしもう慣れてしまいました。都市を離れようとは少しも思っていない」と話す。

6. HIV問題は未だくすぶり続ける

HIVへの感染率がこの20年で格段に下がってきたとは行っても、HIV陽性に感染してしまったカンボジア人は、治療が受けられないなどといった問題を未だに多く抱えている。NGOが発表した文書には、「弱い立場にある人々は何らかの汚名を着せられたり、社会的に無視や差別をされやすく、多くの問題に直面しており、政府の支援を必要としている」との内容が書かれている。9/22の会議開始に当たって、UNAIDSの地域コーディネーターMarie-Odile Emond氏は、「トランスジェンダーを抱えたカンボジア人のなかにも、HIV対策への支援をもっと必要としている人々が多くいます。たとえ、HIV感染率が0.7%まで落ちたとしても、このHIVやAIDSといった問題にはもっと気を付けていないといけません。特に風俗関係の仕事についている人、男性同士でセックスを楽しんでいる人、ドラッグに嵌っている人、トランスジェンダーの人などは、絶対に注意をしてください」と彼女は話す。

また、HIVに感染しているトランスジェンダーのカンボジア人1,500人以上が集まったコミュニティが存在し、彼らは小規模ながらも都市活動を行なっている。彼らは、HIVやAIDSを抱えた人々達の中でも、ひときわ汚点だとみなされている団体だ。Rainbow Community KampucheaのSrom Srun氏は、「HIV、AIDSを抱えたトランスジェンダーのカンボジア人は、社会的にも疎外されやすい存在です。6月、HIVに感染しているトランスジェンダーのカンボジア人2人が、公の秩序を乱したとして警察に捕まりました。しかし彼らは自分たちのHIV感染に関して公になると困ると思い、その病気に関しては秘密にしていた」と、話す。National AIDS Authorityの副議長Dr Kao Try氏は、「国際支援なしでは、感染を抑制するための確固たる解決策を生み出すことは難しい」と話している。

7. 外国人が2人撃たれる

9/27(金)の夕方から9/28(土)にかけて、プノンペンの人気エリア Tonle Bassac において、離れた別々の場所で2人の外国人が撃たれる、といった事件がおこった。コミュニン警察チーフ Sok Sam Outh 氏の話によると、金曜日の夜7時頃、ストリート308と21の角で、夕食に出かけていた年配のアメリカ人カップルが武装した男たちに囲まれたようだ。次の日、日本人の Sakiko Takaya さん 33歳が Daun Penh のナイトマーケットにおいて買い物を楽しんでいたら、20時頃2人の武装した強盗に襲われて、銃で撃たれた。



金曜日の事件では、「アメリカ人夫婦の男性の方は、鞆や携帯電話を守ろうとしたために左足を撃たれました。女性の方は無事でしたが、強盗達は夫婦のお金や携帯電話を奪ってバイクで逃げて行きました」と、Sam Outh 氏は話す。現地のフォトグラファー John Vink さんは、事件のおよそ30分後に警察が現場に到着したと証言する。「私は女性が5回か6回、悲鳴を上げるのを聞きました。そして銃声が上がったのです」と Vink 氏は言う。夫婦は Piccola Italia というイタリア料理店に向かう途中で事件にあった。以前から何度もこのレストランを訪れており、今回の事件はレストランから100メートルも離れていない地点で発生した。

また土曜日の事件に関して、強盗にあった際被害者の Takaya さんは妹といっしょに行動していたようだ。「強盗は彼女の太ももに向かって発砲しバッグを奪い取りました。中には300ドル以上のお金が入っており、また現場からすぐに逃げていきました」と、警察官の Bory 氏は話す。またプノンペン軍警察に所属する Major General Rath Sreang 氏は、「Takaya さんは Calmette 病院で傷の治療を終えたが、彼女を襲った2人の若者に関してまだ特定されていない。軍警察は、事件を解明し犯人を捕まえるために現在必死で動いています」と話している。

8. カンボジアの人的資本指数、域内最下位

ダボス会議を主催する世界経済フォーラム(WEF)がこのほど初めて発表した「人的資本指数」で、カンボジアは122カ国中96位と東南アジア諸国の中で最下位となった。内訳をみると、「労働力」は42位。人口の平均年齢は23歳と、ラオス(20歳)、フィリピン(22歳)に次ぎ、労働力人口が豊富であることが評価につながった。一方、「教育」は99位、「健康・ウェルネス」では102位だった。成人識字率は73.9%だが、ラオスの72.7%に比べ高かった。

9. 元最高幹部の「最終弁論」開始＝ポト派の大量虐殺裁判

9/16、カンボジアのポル・ポト政権下で1970年代後半に起きた大量虐殺を裁く特別法廷で、人道に対する罪などに問われている元ポト派最高幹部のスオン・チア元人民代表議会議長(87)とキュー・サムファン元国家幹部会議長(82)の「最終弁論」が始まった。17日からは検察側による論告求刑が行われた後、被告側の意見陳述などを経て31日までに結審する予定。判決は来年前半と見込まれている。特別法廷では元最高幹部4人のほかにトゥールスレン政治犯収容所のカン・ケ・イウ元所長(70)も起訴され、終身刑の二審判決が確定している。

10. 最近の外資の進出状況

・タマホーム、プノンペンでサービスアパート開業

10/01、住宅メーカーのタマホーム(東京都港区)は、プノンペンにサービスアパートを開業した。日本人を含む外国人向けだが、将来はホテルやカンボジア人富裕層向けの戸建て住宅ビジネスの展開も検討している。プノンペンの空港と中心部の間に位置する物件名は「タマサ・サービスアパート・アンド・ビラ」で、部屋数は全26戸。単身者を対象としているが、全部屋ともキッチンを完備している。日本語スタッフがおり、45~78平方メートルの部屋が月1,090~2,260米ドル(約10万9,000~22万6,000円)。敷地は1,813平方メートルを確保しており、将来は拡張も可能だ。隣接している会員制の「カンボジアン・カントリークラブ」で、テニスやプールなどの設備利用が可能となる。

・J1新潟、カンボジアにチーム

9/16、J1新潟の下部組織でシンガポール・リーグに参加しているアルビレックス新潟・Sは、カンボジア1部リーグに来年1月から参戦する新チーム「アルビレックス新潟プノンペン」を設立すると発表した。日本のスポーツビジネス輸出が目的で、カンボジアの首都プノンペンを拠点にする。所属選手の大半はカンボジア人で、今後は日本人選手も獲得する予定。

以上